様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１１７９

研究課題名（和文）批判的教授学の小中高社会系教科への応用・実用化に向けた研究

研究課題名（英文）Critical Pedagogy for K-12 curriculum

研究代表者
渡部　竜也（Watanabe, Tatsuya）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０４０１４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、次の３つの成果があった。１点目は、ジルーらの批判的教授法の教育論と、エニスらの批判的思考の教育論の違いについて、その思想的な面および具体的な実践レベルでの違いの両面から明らかにしたこと。２点目は、批判的教授法の教育論に基づく授業について、小中高それぞれにおいて、具体的な授業計画を作成したこと。３点目は、批判的教授法の指導配列の原理について具体化したことである。

研究成果の概要（英文）：The fruits of this research is clarifying (1) the properities of critical pedagogy theory and teaching method, comparing with Robert Ennis's critical thinking theory and (2) the sequence of teaching method and contents of critical pedagogy, and (3) developing curricular instruction for K-12 of critical pedagogy.

研究分野：社会科教育学

キーワード：批判的思考　批判的教授法　カリキュラム

１．研究開始当初の背景

我が国において、ジルーらの批判的教授法の考え方は、専ら教育哲学者たちの関心の域を出ず、まったく学校現場にとって役に立つ形で伝えられなかった。筆者はすでにこうした事態を打破するために、彼らの考え方を現場に還元するための研究に取り組み（ジルーの授業計画が載る *Teachers as Intellectual* の翻訳（『変革的知識人としての教師』として春風社から出版））、その教材化や授業化に努めてきた。しかし、これらの多くは高校用であり、そのためやや内容も高次であるとの批判があった。こうした授業を高校で行うためには初等段階での準備が必要になるのではないかという意見も頂戴した。

筆者としては、こうした意見を踏まえて、批判的教授法の小中高カリキュラムへの応用を考えるための研究に取り組む必要性を感じるようになった。

またその一方、批判的思考の研究者の中には、批判的教授法を、エニスやベイヤー、リチャード・ポールら批判的思考教育論と同等視する動きが見られた。これらとジルーらが考える批判的教授法とが同列に扱われることも少なくなく（これは日本だけでなく合衆国でも見られる傾向である）、また違いが指摘されたとしても、ジルーのエニスらを批判するコメントが紹介される程度にとどまっていた。本科研を申請する段では、批判的教授法の教育論・授業論上の個性についても、再整理する必要があるという問題意識も芽生えてきた。

２．研究の目的

以上の当時の研究背景や筆者の問題意識から、本研究の目的は、次の２点となった。

（１）批判的教授法の教育論・授業論上の特質を明らかにすること。
（２）実用化するに当たって、小中高の段階性を意識した教材づくり・授業づくりを行うこと。

３．研究の方法

批判的教授法の教育論・授業論上の特質を明らかにするために、筆者が計画したのは次の方法である。

（１）エニスらの批判的思考の教育論・授業論との比較考察。
（２）思想的背景にあるラディカル・デモクラシー関係の書物の整理。
（３）批判的教授法の教育論・授業論が確認できる文献資料の収集（特に『デモクラティック・スクール』誌に注目する）と類型化および段階性の解明。なお、できるだけジルー以外の教育論についても調査に当たる。
（４）小中高の段階性を意識した配列原理を明らかにし、それに基づいた教材化・授業化を行う。

なお、現地での実践観察や当事者への聞き取りも申請時には予定していたが、筆者個人の体調不良（入院）や、妻が双子を妊娠・出産するといったプライベートな問題があり、これは実現しなかった。その分、資料収集と文献中心の研究という点で、この研究をカバーすることになった。

４．研究成果

次の３点にまとめられる。

１点目は、ジルーらに見る批判的教授法の教育論・授業論と、エニスらに見るそれとの違いを、具体的な指導計画の違いなどから具体的に明らかにしたことである。その特質の違いは、前者は社会学主義的、後者は心理学主義的であるとまとめることができる。つまり、批判的教授法は、批判対象となるテキストに対して、その著者が持つ「準拠枠」を明らかにし、そしてそれと社会が持つ規範やそれを生み出すシステムとの関係から説明しようと試みるが、エニスらその著者個人の誤謬や手続き上のミス、個人の価値観などに問題を帰してしまうことが明らかになった。これについては、『学芸社会』第 33 号に成果報告をしている。

２点目は、批判的教授法を育成するための小中高での配列原理について具体化したことである。これは主に『デモクラティック・スクール』に紹介されている授業事例などを参考に原理を抽出した。配列原理は次のようになる。

・小学校では、集団の中にいると、その集団内部で「常識」とされるものは、その他の可能性や選択肢について見えなくなってしまうことがあること（＝自明という概念）を理解させることを軸としていく。

・中学校段階では、そうした集団は意図的に作られることがあることを理解することを軸としていく。

・高校段階では、現実社会におけるそうした事例を発見できるようになることに重点を置いた指導を重視する。

なお、この研究の成果については、現在執筆中であり、2017 年度か 2018 年度の東京学芸大学紀要に掲載予定である。

３点目は、明らかとなった教育論を元に、具体的な授業構想を立てたことである。中高用に開発した授業事例と、小学校用に開発した事例を紹介したい。

【中高用：概略のみ】

・日米の教科書の違いを比較させる。	（日本は生徒１人１人ずつに教科書が配られるが、米国では教科書貸与制度が採用されている。米国の教科書はオールカラーでページ数も多い。持ち運べない。）
・教師はそれぞれどのようにその教科書を活用しているのか想像してみよう。	（日本の教科書とは異なり、米国の教科書は家に持ち帰ることができない。つまり教師は教科書の記述内容を暗記させたくても、それができない構造となっている。また、カラーペンで文章に線を引く行為や、アンダーラインを引く行為もできない。また1000 頁近くある米国の教科書は、その記載内容のすべてを授業で取り上げることは困難である。米国の教師は、教科書の記述内容を教えるのではなく、教科書を資料集として活用していることが窺える） （米国の教科書は、巻末に発問が付いている。これらは教科書の内容を確認するものもあるが、「なぜなのか」「どうするべきか」といったオープン・クエスチョンも多く設定されている。）
・どうしてこのような教科書の違いが生じるのか。それぞれどのような狙いがあるのか。どちらが為政者にとって都合がよいのか。	（米国の教育制度は、子どもたちに教科書の記載内容を記憶させることではなく、教科書を通して、何か問いを考察したり、分析したりすることを期待している。そうしたことを学力と捉えている可能性が高い。日本の場合は、教科書の記述内容を記憶させるのに向いているし、それを前提とした教科書の作りとなっている。為政者にとっては、都合の良い一つの見解を子どもたちに無批判に（教科書の権威だけで）伝えることができる可能性が高いのは、日本の教科書システムである。）
・どうしてこうした教科書が、我が国で当然とされてきたのか。	（検定制度を通したお上による「客観・中立のチェック」がこれを可能にしている。だがこれは、日本社会のお上を無批判に信用するという気質、いわゆる「お上意識」の上に築き上げられた制度であると言える。） （また、「世界中、教科書は同じだろう」という思い込みがあり、その自明性を疑っていないことも原因の一つにある）
・どうして米国では、日本とは異なる制度が採用されているのか考える。	（自由に考察させる）
・どちらの制度が民主主義体制の維持・発展にとって望ましいのか判断する。	（自由に考察させる）

【小学校用：概略のみ】

・マルコポーロの旅行記を読ませ、そこに出てくる「ユニコーン」が、現在でいうところのどういった動物であるのか予想させる。	（これは、マルコポーロが実はインドネシアでサイを見たときの感想である）
・どうしてサイを見て、マルコポーロは「ユニコーン」だと考えたのか。それはユニコーンとは別の動物であると理解しなかったのか、理由を考えてみる。	（マルコポーロは自分のレンズから動物を説明しようとしているからである）
・どうしてマルコポーロは自分のレンズで動物を説明してしまったのだろう。マルコポーロは、現地の人物に「あれは何ですか」	（マルコが住む世界で神話は大変信仰されていた。また、そうした神話や神の存在を証明しようとする研究などが当時は学

とは尋ねなかったのだろうか。	問とされていた。集団内部で当然とされている見方から脱却することがいかに難しいのかを物語る事例である）

なお、最初の授業については『社会科教育』2015 年 11 月号に成果を掲載している。後者の授業などについては、東京学芸大学紀要（2018 年）に渡部竜也「批判的教授法の育成段階論に関する原理的研究」（仮題）にて紹介する予定である。

学会発表については、当初、昨年の日本社会科教育学会で予定していたが、病気などの理由により研究が遅れ、結果、間に合わなかった。本研究の完成は実質的に３月までずれ込んでしまった。

本年度、改めて日本社会科教育学会などでの発表を予定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
掲載が決定しているもの（既に出版されているもの）については、次のものがある。

① 渡部竜也、米国における「批判的思考」論の基礎的研究（Ⅲ）―ジルーの教授計画に見る批判的教授学の批判的思考の特徴とその意義―、学芸社会、33 号、2017 年

② 渡部竜也、「社会問題提起力」から考える社会科授業デザイン、社会科教育、11 月号、2015 年

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
渡部竜也（WATANABE, Tatsuya）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０４０１４４９

(2)研究分担者、連携研究者は特にない。